

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：32808

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730559

研究課題名（和文） 中学生の非行行動の小学校開始型と中学校開始型の縦断的検討

研究課題名（英文） Longitudinal study of juvenile delinquency in junior high school students: elementary school onset type and junior high school onset type

研究代表者

小保方 晶子 (OBOKATA AKIKO)

白梅学園大学子ども学部 准教授

研究者番号：00442088

研究成果の概要（和文）：

本研究は、中学生の非行行動のリスク要因を縦断的研究から明らかにすることを目的とし、2007年度から3年間縦断調査を行っている中学生（研究開始時小5）約2000名を対象に引き続き2010年度から縦断調査をさらに3年間実施した。方法は質問紙調査である。中1で、問題行動が開始された子どもの予測要因として、小6時のゲームの使用時間の長さがあることが示唆された。また、中1でみられる問題行動は小6時の問題行動と相関があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This longitudinal study examined risk factors for juvenile delinquency in junior high school students. About 2000 junior high school students, who had already been involved in a longitudinal study for 3 years beginning in 2007, were followed for an additional 3 years starting in 2010. The students were administered written questionnaires for the purpose of collecting data. The study found that delinquency during the first year of junior high school was predicted by the amount of time spent playing games during the final year of elementary school. It clearly established that problematic student behaviors during the first year of middle school are correlated to problematic behaviors in the last year of elementary school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：非行、中学生、移行期、小学生、中学校、縦断的検討、開始時期

1. 研究開始当初の背景

(1) 中学校への移行に伴い、飲酒、喫煙、暴力などの非行行動が増加する。生徒指導上の問題からも小中連携がより一層重視され、小中一貫教育の議論や試みが開始されてきている。中学校で非行行動がみられる生徒の多くには、既に小学校の時点で何らかの問題行動がみられると指摘する教師は多い。

近年、海外の縦断研究の成果から、非行には、いくつかの筋道があることがあることが明らかになっている。Moffitら(1996)は、非行をライフコース持続反社会性タイプと、青年期限定反社会性タイプに分類している。問題行動の開始は、前者が児童期であり、後者が青年期である。ライフコース持続反社会性タイプの方が多動、衝動性、情緒不安定、攻撃性(Moffit et al., 1996)などがみられ、問題行動の開始時期によって、問題の程度や、パーソナリティ特徴に差があることが指摘されている。日本では、中学校への移行に伴い、学校システムや生活リズムが大きく変化する。また、発達面でも、心身共に変化が大きく様々な問題が出やすくなる。中学校段階における非行行動の増加には、小学校から問題が見られた子どもとそうでない子ども双方に対して、これらの要因も影響していると考えられる。よって、中学校移行期を含め、小学校段階から縦断的に子どもたちを追い、開始時期ごとのリスク要因を明らかにしていくことが必要である。

(2) 中学校で増加する非行行動の発生とリスク要因を明らかにするために、小学校から中学校への移行期を含めた縦断的研究が不可欠であると考え、中学1～3年生約2000～2500名と、対象中学校に進学する小学5年生、6年生約1000名を対象とした縦断調査を3度行った。(平成19年度に小5であった子どもを対象に3年間縦断調査し、現在中1)。同じ子どもを対象として中3まで縦断調査を行い、中1から中3に調査期間を延ばすことで、中学入学後に非行が開始された子どものリスク要因を、小学校から問題が継続している子どもと比較し明らかにできると考えた。

2. 研究の目的

(1) 小5から中3までの5年間の縦断調査に基づくデータから、小学校から問題行動が見られた子どもと、中学入学後に問題行動が見られた子どものリスク要因を明らかにする。

(2) 小学校段階に問題行動が見られたが、その後問題行動がみられなくなった子どもに着目し、非行が深化した子どもとそうでない子どもの筋道の違いと非行の防御要因を

明らかにする。

- (3) 縦断的調査から明らかになった(1)
- (2)の結果の妥当性を確認する。

3. 研究の方法

(1) 対象者 中学生1年生～3年生各学年500名を対象に3年間にわたり質問紙調査を縦断的に行う。対象者は、現在縦断調査を行っている(小5から3年間)同じ子どもである。

(2) 質問紙の内容

- ①問題行動 外面的な問題行動については、教師への反抗や学校での問題行動を含め非行傾向の内容を設定する。内面的な問題については、抑うつを中心とした項目を設定する。
- ②生活リズムとの関連を明らかにするために、起床時間、就寝時間、携帯電話の使用時間、朝食、夕食、部活動へ参加等を尋ねる。
- ③身体的成熟について捉えるために、身長、体重を尋ねる。
- ④重要な他者との関係について、親子関係、友人関係、教師との関係を把握する項目を設定する。
- ⑤個人の要因について、攻撃性、セルフコントロール、向上心、ソーシャルスキルを把握する項目を設定する。

4. 研究成果

(1) 2010年度に、中学校4校、中1～中3、1816名に縦断調査の第4回目(平成22年度からの科学研究費による調査では第1回目)を行った。2011年度に、中学校4校 名に、縦断調査の第4回目を行った。2012年度に、中学校4校2012名に縦断調査の第6回目を行った。

(2) 横断調査の結果から、問題行動の現状と、各々の問題行動のリスク要因を明らかにした。

- ①中学生の出会い系サイトに関する問題行動について、「出会い系サイト」の経験者は少ないが、「インターネット」を通じて出会った人とメールをした経験のある子どもが多いことが明らかになった。経験のある子どもは、就寝時間が遅い、携帯の使用時間が長い、親による監督が低い、先生との関係が悪い、学校を楽しみという気持ちが少ない、抑うつが高い、セルフコントロールが低かった。インターネットを通じた出会いは、出会い系サイトと全て関わるものではないが、子どもの特徴が非行や出会い系サイトの経験のある子どもと共通しているため、今後問題が深化していく危険性のあるものと考えられた。
- ②小学校5年生～中学校3年生における親

子関係における暴力の問題行動については、どの学年でも一定の割合が経験していた。女子は男子と比較して、親と喧嘩した時に物にあたる傾向が強い。親への暴力の経験のある子どもは、ない子どもより、親子関係が親密でない、親による暴力が高いなど親子関係が悪い。友人関係の親密さには違いがみられないが、先生との関係が悪く、学校を楽しんでいるという気持ちが低かった。また、抑うつが高く、睡眠時間が短かった。家庭において暴力のある子どもは、学校種に関わらず、小学生、中学生ともに同じ特徴がみられた。また、非行のある子どもと同様の特徴がみられることが明らかになった。

(3) 小学校6年生と中学校1年生の2年間の縦断データの検討を行った。

① 小学校6年生から中学校1年生への移行期における問題行動の関連について検討した。結果、小6時の抑うつの高さは、中1時の抑うつの高さとの正の相関があること、小6時の親への暴力は中1時の親への暴力との正の相関があること、小6時の万引き/金品持ち出しは、小6時の親への暴力、中1時の親への暴力との正の相関があることが明らかになった。また、小6時の起床時間の遅さは、小6時の生活面での問題行動の量だけでなく、中1時での生活面での問題行動の量とも関連していた。

② 中学1年生で問題行動が開始された子どもの小学校の時期の特徴を明らかにした。結果、小学校時期のゲーム使用時間の長さが中学校の問題行動の予測要因である可能性が示唆された。

中学校における非行の増加は、中学校の指導体制の問題が指摘されることが多いが、中学校での問題行動がみられる子どもは、小学校の頃から問題行動や生活リズムの乱れがあることが明らかになった。

(4) 6年間の縦断調査を行い、2011年度で、小学校5年生から中学校3年生までの縦断データの第1回目が揃った。2012年度に、5年間のデータの第2セットが揃った。縦断データのコホートを2つ分析することにより、調査結果の妥当性を確認することが可能である。縦断研究について妥当性の確認を行っている研究は国内外において行われていない。

日本の非行研究の分野において、横断調査による相関研究や、非行のある子どもとない子どもの比較が多かった。加えて、青年心理学の分野でのこの年齢に関する研究は、小学生の中での比較、中学生の中での学年比較に留まっている。本研究は、縦断的調査を行っていることで、非行の発生について、小学校から中学校への移行期を含めて実証的に明らかにできつつある。日本では、開始時期の違

いに着目し、非行の発生を検討した研究は行われていない。本研究では、非行のタイプ別のリスク要因を明らかにすることができ、本研究の意義として、リスクの高い子どもに対し、早期の介入が可能になることがある。また、中学移行期を含めていることから、本研究の成果に基づき、中学校への移行期におけるなめらかな移行や連携教育、一貫教育など、小中学校の教育実践に対し有益な示唆を与えることができると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

小保方 晶子、中学生とインターネット、地域と子ども学、第5号、2012、48-55、査読無し。

小保方 晶子、発達障害のある子どもと非行、地域と子ども学、第4号、2011、22-26、査読無し。

〔学会発表〕(計4件)

小保方 晶子、中学生のインターネットを通じた出会いの現状と背景要因、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月10日、名古屋。

小保方 晶子、中学生の非行傾向行為の規定要因：生活リズム、親子関係、学校要因、個人要因からの検討、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月27日、東京。

小保方 晶子、発達障害のある子どもの問題行動のリスク要因と防御要因、日本心理学会第74回大会、2010年9月21日、大阪。
Akiko Obokata, Regulatory Factors for Mild Delinquency in Japanese Junior High School Students: Daily routines, family factors, school factors, and individual factors, American Psychological Association 118th Annual Convention, 2010年8月13日, San Diego, California, USA.

〔図書〕(計3件)

小保方晶子、金子書房、児童心理、2013年8月号、印刷中、9ページ

小保方晶子、丸善出版、発達心理学事典、2013、2ページ

小保方晶子、新曜社、発達と支援、2012、9ページ

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小保方 晶子 (OBOKATA AKIKO)
白梅学園大学、子ども学部、准教授
研究者番号：00442088

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者